

2020年6月7日

三位一体の主日

菊地功大司教 ミサ説教

「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように」

パウロはコリントの教会に宛てた書簡を、この言葉で締めくくっています。コリントの教会共同体への様々な忠告や教えに満ちあふれた書簡は、いつの時代にも立ち返るべき教会共同体のあり方を教えるパウロの心のこもった書簡です。愛情に満ちあふれた教えや、時に厳しい訓告をさまざまにしたためた言葉を、パウロはこの祝福の言葉で締めくくります。

そして今を生きるわたしたち教会は、感謝の祭儀を始めるために、この言葉を司祭のあいさつの一つとしています。パウロが自らの教えの締めくくりとした言葉によって、わたしたちは感謝の祭儀を始めます。すなわち現代を生きる教会は、感謝の祭儀のために共同体として集まるごとに、パウロが締めくくった地点から、そのたびごとに新しいスタートを切っています。

教会は、主イエスの恵みにあずかり、神の愛に満たされ、聖霊に導かれて、聖徒の交わりのうちに、日々新たに生かされていきます。主イエスの恵みにしても、神の愛にしても、人間の常識を越えたあふれるばかりの恵みであり愛であることを、ヨハネ福音は示唆しています。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」

「自ら創造した人間を、独りたりとも滅びの道に捨て置くことはない。愛に根ざした神の決意が伝わってくる福音の言葉です。三位一体の神とは、わたしたちに、これでもか、これでもかと、ありとあらゆる手を尽くして迫ってく

る、神の愛の迫力を感じさせる神秘であります。

「兄弟たち、喜びなさい」。パウロは、コリントの教会に向かってそう呼びかけます。様々な試練があり、教会共同体には諸々の課題や難題があったとしても、その人間の限界を凌駕するほどの三位一体の神の愛に包まれていることを実感するならば、悲しんでいたり怒っていたりする暇はない。その神の愛の迫力で、喜び以外には考えられないだろうというパウロの呼びかけです。

「完全な者となりなさい」。完全な者は神ご自身以外には考えられず、わたしたちは自分の力では完全になることはあり得ません。それならこの言葉の意味は何だろう。「初心に返りなさい」と訳している聖書もあるのですが、信仰の原点、すなわち、主イエスをはじめて信じた時のように、自分の思いではなくて、神の心にすべてをゆだねまかせよという、呼びかけです。わたしたちは自分の弱さを自覚したときにはじめて自我の殻を捨て去り、神の力が存分に働く者となります。

「励まし合いなさい」。わたしたちは、励まし合う共同体でしょうか。互いに牽制し合う共同体になっていないでしょうか。一つの体の部分としての役割を果たすならば、裁きあったり咎めあったりするのではなく、互いに励ましあうことで、自分の足りないところが支えられます。

「思いを一つにしなさい」。わたしたちが語るキリストの体における一致は、同じことをおなじように考えて、おなじように行動することではありません。一致は一緒ではありません。聖霊はわたしたち一人ひとりに異なるたまものを与えられた。その聖霊のたまものを忠実に生かし、聖霊の交わりの中に生きるとき、わたしたちは異なる場で異なることをしていても、同じ聖霊に満たされ導かれることで、一致しています。

「平和を保ちなさい」。平和は、しばしば指摘されるように、単に争わないことではありません。平和は、神の秩序の実現です。神が最初に世界を創造されたときの、秩序の実現です。

パウロは、わたしたちが共同体にあつて、喜び、完全な者を目指し、励まし合い、思いを一つにし、平和を保つときに、愛と平和の神が共にいてくださると指摘します。

ですから、わたしたちの共同体に、もし仮に、愛と平和の充満が感じられないのであれば、喜び、完全な者を目指す、励まし合う、思いを一つにする、平和を保つので、どれか一つが欠けているのかも知れません。

新型コロナウイルス感染症の蔓延で、わたしたちは、四旬節も復活節も、教会に集うことができませんでした。復活節が終わった今、少しばかりですが、希望が見えてきました。緊急事態宣言が解除され、しばらく様子を見極めていましたが、そろそろ教会に集まる準備を始めても良い時期になってきたと思います。

もちろん感染症が終息したわけではなく、未知の危険が潜んでいますから、慎重に行動しましょう。教会に集まったり、ミサに出たりすることにも、しばらくはいろいろな制約を設けなくてはなりません。不満に感じることも、面倒に感じることも多々あるでしょう。大変申し訳ないと思います。しかしそれは、自分の健康を守るためだけでなく、他の人たちのいのちを守るための積極的な行動です。それがひいては、社会の一員としての教会の責任を果たすことにもつながります。

長い自粛期間を経て、再び教会に集おうとしているわたしたちは、これからどのような共同体として存在しようとしているのでしょうか。

「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように」と締めくくったパウロの言葉を受けて、そこから新しいスタートを切ろうとするのです。灰の水曜日以前の教会に、そのまま戻ることを考えないでください。わたしたちを交わりに導く聖霊は、教会に常に新しい息吹を吹き込んでいます。わたしたちは、過去に戻りません。

教皇フランシスコは、「福音の喜び」にこう書いておられました。

「宣教を中心にした司牧では、『いつもこうしてきた』という安易な司牧基準を捨てなければなりません。皆さんぜひ、自分の共同体の目標や構造、宣教の様式や方法を見直すというこの課題に対して、大胆かつ創造的であってください。」(33)

教会に出かけることもできずに自粛生活を続けてきた結果として、何か新しい発見はあったでしょうか。大切にしなければならぬものに、何か新しい気づきはあったでしょうか。

これまで教会は、日曜日に集まってくることで、共同体であるつもりでいました。でも三ヶ月以上も、実際に教会に集まれなくなっています。わたしたちは、共同体でしょうか。共同体であるならば、何がわたしたちを繋いでいるのでしょうか。わたしたちをつなげているのは、オンラインのミサではありません。

わたしたちは、「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わり」によって、繋がられています。わたしたちに迫ってくる迫力に満ちあふれた、神の愛で繋がっています。わたしたちは、24時間その愛に包まれているのですから、わたしたちはどこにいても、常に、教会です。教会に行くから、教会になるのではなく、わたしたちそのものが教会です。

わたしたちは今、教会共同体として新たなスタートを切るための準備を始めなくてはなりません。三ヶ月前の続きを再開するのではなく、困難を乗り越えてきたいま、新たなスタートを切ることを目指したいと思います。「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わり」に包まれて、心と思いを一つにした教会共同体で、信仰を深め、信仰に生き、信仰を伝えてまいりましょう。